

序

運動学がリハビリテーションの根幹をなす科目であることは、衆目の一致するところであろう。しかし、物理学や解剖学、生理学など多岐にわたる知識が必要とされるため、苦手意識をもっている学生も多い。さらに教える側も、運動学全般にわたって精通している教員ばかりとはいえない。「運動学」というワードが入った書籍は多々みられるし、これまでに分担執筆をさせていただいたこともある。しかしそれらをもってなお、養成校の教員と話をする、テキストに加えて追加資料を配布している、名著ではあるがどう教えていいかわからないといった意見を耳にすることが多い。さらには、臨床現場に出てからこそ必要とされる運動学の知識であるにもかかわらず、若手セラピストには養成校で学んだ情報を確認、あるいは更新する機会がない現状を目にしてきた。このような状況であるにもかかわらず、打開策がみえず手をこまねいていた。

そんな矢先の2016年11月、企画についての打合せ（実際には相談レベル）として羊土社の冨塚達也氏が来校した。当初は分担での出版を考えているので編集の仕事をして欲しいとのことであった。しかし、初対面にもかかわらず様々な、そして上記のような話をするなかで「発行が1年遅くなってもいいので単著での出版を」と展開したことを記憶している。そして12月初旬には、最初の企画書がメールで送付されてきた。そこでふと我に返ったのである、これは大変な作業がスタートするぞと。

なにが大変か。執筆量が多いことではない。運動学の最新知見を含めて実践の文脈上で語る、つまりPT・OT養成に必要な運動学の集大成になるからだ。医学・工学を含めた広義の自然科学の発展に伴い、運動学の内容はブラッシュアップされている。しかし、現時点でPT・OTに必要な運動学の全体像を捉えられているセラピストは少ない。ここには、運動学は難しい、苦手だという思い込みも少なからず影響しているように思われる。本書の章立ては、私自身が学生向けに講義している「運動学」の内容をベースに、エッセンスを網羅することにした。これまでは他の書籍を教科書指定していたのだが、その内容のすべてを教えられたわけではない。時間的な制約はもちろん、内容が難解であることも大きな理由であった。そのため本書の執筆に際しては、運動器の基本から姿勢・歩行まで、運動学の重要ワードをカバーしつつも、必要以上の知識は省き、できるだけコンパクトにまとめることを意識した。また、カラーのイラストや写真を多用することで、ビジュアル面でも学びやすくなるよう工夫した。さらには解剖学書を並べて見なくても済むよう、筋の図など巻末付録も充実させた。本書は養成校での講義用テキストとしての使用を想定しているが、現職のセラピストが運動学の知識を振り返るための書籍としても有用なはずである。

本書の編集にあたっては多くの方々のお力をいただいている。谷田惣亮先生，宇於崎 孝先生，高田雄一先生，そして同僚の中俣 修先生には，授業中に学生が簡単な実技を行えるように設けた「Let's Try」，臨床医学に接続するための「臨床で重要！」の執筆協力，そして本文に対する助言，アドバイスをいただき，大変感謝している。また，既存の書籍とは一味異なる書籍を作り上げようとする強い気持ちをもった羊土社編集部の冨塚達也氏，望月恭彰氏の多大なる協力もあり，刊行の運びとなったことに深く感謝する。

最後に，本書の執筆においては学習が苦手な学生でも「運動学」の必要な知識をわかりやすく理解できるよう，今の自分のベストを尽くしたつもりである。この書籍『運動学』を手にとっていただいた方が，この分野の学術を深めるための一助になれば幸いである。

2019年8月

山崎 敦